博士学位論文審査要旨

２０２０年７月１６日

論 文 題 目：「ZUKAN インタビュー」実践による地域人材リゾームの形成
－札幌人図鑑の M-GTA 分析をもとに－

学位申請者：　西尾　直樹

審 査 委 員：

主　査：	総合政策科学研究科	教授	今里　　滋
副　査：	総合政策科学研究科	教授	新川　達郎
副　査：	福知山公立大学地域経営学部	教授	谷口　知弘

要　　旨：

本論文は、複雑と混迷の度を加える現代社会を把握するアプローチとして複雑系科学観をベースとした「生命論パラダイム」に依拠しながら、地域社会における人材の自己組織化による「地域人材リゾーム」の形成というソーシャル・イノベーションの可能性を仮説として掲げ、それを自ら開発した「ZUKAN インタビュー」という独自の人材発掘・データーベース化・ネットワーク化の手法を用いた社会実験によって実証しようとした研究成果である。

本論文は 6 章で構成される。序論たる第 1 章は現代社会の特質やそれを適切に解析できる生命論パラダイムについて詳述し、この引照枠組による地域人材リゾーム形成のツールとしての ZUKAN インタビューの設計思想やその稼働条件について考察を加えている。

第 2 章では、生命論パラダイムの嚮導概念としての「自己組織化」が検討される。地域の人材が自在につながりあい、相互作用の中から創発が生まれ、新たな秩序を形成していく自己組織化を、理論、手法、実践、歴史、文化等の点で多面的に整理している。

第 3 章では、自己組織化を触発し推進する手法として筆者が独自に開発した ZUKAN インタビューについて、300 日で 300 人の研究者を紹介した「研究者図鑑」からその後 1500 人以上に広がる「札幌人図鑑」へ至るプロセスや体系化した各要素を精細に整理している。

第 4 章では、「札幌人図鑑」インタビューで蓄積された膨大な事例を対象として、出演者および関係者へのヒアリングを行って質的データを収集し、M-GTA を用いて解析した結果、32 の概念と、そこから 10 のカテゴリーを生成せしめ、さらに、3 のコアカテゴリーに集約している。

第 5 章では、その分析結果を受けて、地域人材リゾーム形成に対する ZUKAN インタビュー実践の効果、およびその実践が地域社会に定着するための条件という 2 つのリサーチクエスチョンに対して、創造的個の発掘、創造的個の強化、そして情報集積効果への解を導き出している。

最後に、第 6 章では、これまで得られた知見を整理しつつ、地域社会において生命論パラダイムに即したソーシャル・イノベーションの実践はどのようなものであるべきか、その中で ZUKAN インタビューはさらにどのような役割を担いうるのかについて展望的な考察を行い、今後の研究課題に言及して論を結んでいる。

本論文は、筆者が希求する「地域人材リゾーム」が可視化できる程度に十分に具体化されているとは言えない点等の課題は残るが、しかし、自己組織性の理論に支えられた持続可能な地域社会構築には、志ある“凡人”を発掘し、その人的資源や関係性をあたかも地下茎（リゾーム）のごとく拡張させていくことが必要であると説き、その可能性を ZUKAN インタビューという独自の手法で実証した点は高く評価できる。よって博士（ソーシャル・イノベーション）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

２０２０年7月１６日

論 文 題 目：「ZUKAN インタビュー」実践による地域人材リゾームの形成
－札幌人図鑑の M-GTA 分析をもとに－

学位申請者：　西尾　直樹

審 査 委 員：

主　査：	総合政策科学研究科	教授	今里　　滋
副　査：	総合政策科学研究科	教授	新川　達郎
副　査：	福知山公立大学地域経営学部	教授	谷口　知弘

要　　旨：

学位申請者に対する学力確認試験は、２０２０年７月１６日午後３時から午後４時までオンライン（Zoom）を用いて実施した。まず、西尾氏自身が約３０分間論文の概要についてのプレゼンテーションを行い、その後約３０分間、西尾氏と審査委員との間で質疑応答を行った。

審査委員からは、京都町衆モデルの普遍的適用可能性やそこにおけるリゾームの萌芽の有無、複雑系や生命論的アプローチの理論的妥当性、自己組織性におけるゆらぎやシステム変化に ZUKAN インタビューはどのように適応するのか、M-GTA が ZUKAN インタビューの傾聴効果を十分に捕捉できているのか等について質疑があったが、学位申請者の応答はいずれも満足のいくものであり、西尾氏の十分な研究能力と専門知識を確認することができた。

また、外国語能力については、とくに理論研究に関する部分を中心に英語文献を引用しており、その理解、引用、参照においても誤りがないことを確認し、研究に必要な英語運用能力は十分であると判断した。

以上のことから、西尾氏の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　「ZUKAN インタビュー」実践による地域人材リゾームの形成
—札幌人図鑑の M-GTA 分析をもとに—

氏　　名：　西尾　直樹

要　　旨：

「VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）」の時代の社会課題は、一部のステークホルダーや専門家による課題解決型アプローチでは根本的な解決が難しい。複雑性の低い社会においては、個別の課題に対して専門家が過去の経験を基に、処方を考えて対処をしていくことで解決ができた。しかし、現代社会において従来の方法で「問題」とその「解決」、そして、その解決ための「方法」を単純な関係性として捉えてしまっていると、別の悪影響が生じてしまう可能性がある。また、あらゆる局面でカオス状況にある現代社会において、未来は予測していくことが非常に困難であるだけでなく、まったく新しいものが生まれる劇的な変革の未来となっている。さらには SDGs が世界的なムーブメントとなっており、持続可能な未来に向けて、今や身の回りの地域や暮らしに関しても、地球規模かつ俯瞰的・長期的な視野で語られる時代となっている。

このような中、世界の捉え方やアプローチの方法にも、新しい流れが生まれている。その 1 つが、デカルト的科学観をベースとした「機械論パラダイム」から、複雑系科学観をベースとした「生命論パラダイム」への移行（日本総合研究所　1998）である。この言葉は、散逸構造理論を発表し 1977 年にノーベル化学賞を受賞した Ilya Prigogine の考えを中心に、システム理論や複雑系理論の知見を整理し、田坂広志らが概念化したものである。自然科学や社会科学などの学術の分野で定着したのち、2000 年代からは、ホールシステム・アプローチや Teal 組織といった具体的手法の認知と試行の輪が広がってきており、社会や地域コミュニティでの実践レベルで事例が蓄積されてきている。生命論パラダイムの諸要素を念頭においたソーシャル・イノベーションについては、以下のように整理することができる。

①個別の課題解決だけでなく、社会における新しい価値や構造の創造（さらにはその先の持続可能な社会への移行）を視野に入れて、目の前の現実にアプローチをする。

②具体的な実践を計画する際は、生命論パラダイムに類する理論や概念も、プロジェクトのビジョンやプロセス、仕組みの中に取り入れる。

本論文は、生命論パラダイムに関する理論や概念を内包した実践手法として、「ZUKAN インタビュー」を提唱する。そして、ZUKAN インタビューの継続的な実践を通じた、地域社会における人材の自己組織化による「地域人材リゾーム」の形成というソーシャル・イノベーションを長期的なビジョンに掲げる。ZUKAN インタビュー自体は、特定の社会問題に直接的に対応してソーシャル・イノベーションに寄与するものではない。冒頭に述べたような個別対応だけでは解決が難しくなってきている状況において、さまざまな専門性や現場を持つ人々をつなげ、「自己組織性による創発」を生み出し、課題が解決されていくプラットフォームを形成する。そのプラットフォームは、誰かが中心となってトップダウンでまとめる樹木状のツリー型ではなく、それぞれがゆるくつながりながら自律的に活動し自然発生的なコラボレーションから新たな価値が創発される根茎状のリゾーム型である。最終的には、全国各地、さまざまな人や組織が構築している状態になることが、目標とする社会の姿である。

本論は6つの章で構成される。第1章は序論として、まず上記のような時代背景や生命論パラダイムについて詳細に述べ、そうした世界観におけるソーシャル・イノベーションの条件を示す。その上で、研究の対象とするZUKANインタビューや札幌人図鑑の概要を紹介し、以下の2つのリサーチクエスチョンや研究の方法について述べる。

1. 地域人材リゾーム形成への第一歩として、創造的個にアプローチするZUKANインタビューの実践にどのような効果があるか？
2. ZUKANインタビューの設計思想に則った実践が、地域に根差すところまで発展していくために、どのような要素が必要か？

第2章では、生命論パラダイムのキー概念として「自己組織化」をとりあげる。地域の人材が自己組織化し自在につながりあい、相互作用の中から創発が生まれ、新たな秩序を形成していく。この自己組織化を、理論、手法、実践、歴史、文化と多面的に整理する。具体的には、自己組織性の理論、オープンスペース・テクノロジーと京都市未来まちづくり100人委員会、京都市の町衆の歴史と文化から要素を抽出し、地域における人材の自己組織化のモデルとして「地域人材リゾーム」を提唱する。そして、その地域人材リゾーム形成への第一歩となりうる取り組みとして、「ZUKANインタビュー」について言及する。

第3章では、そのZUKANインタビューについて詳細に記述した。インタビュイーの現在・過去・未来を表す3つのキーフレーズを記入されたボードを手に、そのフレーズを使って対話型のインタビューを行い、その模様を二人並んだバストショットで映像に収録しインターネットで配信するという決まった型を持っている。ZUKANインタビューは300日で300人の研究者を紹介した「研究者図鑑」にはじまり、その活動を通じて蓄積したノウハウを体系化し、他地域への展開や、そのプロセスを活用した人材育成のプログラムなどに展開してきた。そのプロセスや体系化した各要素を整理した。その筆者が考案し実践した独自の型を使って、遠く離れた札幌のラジオパーソナリティーが2012年にスタートし、その後1500人以上に広がっているのが「札幌人図鑑」である。

第4章では、この札幌人図鑑を事例としての調査分析について、具体的な方法と結果についてまとめた。調査分析は、出演者および関係者へのヒアリングを通じた質的データの収集とM-GTAの手法を用いて行った。その結果として、最終的に32の概念と、各概念の類似性や相互関係などを検討して10のカテゴリーを作成し、さらに、3のコアカテゴリーを作成した。それらの関係を整理することで、ストーリーラインと結果図を作成し、札幌人図鑑を通じて地域人材リゾームの初期段階を形成するプロセスモデルを提示した。最後に（コア）カテゴリー毎の概念の詳細について理論的検討を行った。

第5章では、その分析結果を受けて、改めて2つのリサーチクエスチョンについて考察し、ZUKANインタビューの実践を通じた効果と、実践する際に必要な要素について検討を行った。1つめの地域人材リゾーム形成への第一歩としての効果については、創造的個の発掘：地域内の知られざる人材を舞台に上げる効果、創造的個の強化：フォーカスされることや、コンテンツの効果、図鑑の構築：取り組みの積み重ねや、情報の集積による効果の3つに、2つめの地域に根ざすまでの発展に必要な要素は、長期の継続と高頻度での更新、インタビュアーの自分ごととの接続、資金の獲得の3つに分けて考察を行った。またその先のリゾームに至る兆しの要素として、ネットワーク化と支援の仕組みの2つについて考察を行った。

最後の第6章では、今後の研究課題や展望、本論の内容の先にある生命論式ソーシャル・イノベーションの実践として目指していきたい地域や社会のあり方、その中でのZUKANインタビューが担いうる役割などを整理した。生命論パラダイムにおいて持続可能な地域を実現していくためには、どこかにいるスーパーマンを待望するのではなく、地域の中で「ヒトなし・モノなし・

カネなし」という困難な状況でもめげずに足を一歩前に出し進んできた「凡人」を増やしていくことが必要不可欠である。ZUKAN インタビューは、いわば地域や社会に点在する凡人の可視化の取り組みである。持続可能な地域のためにそのアーカイブである図鑑は、その人のもつ属性や事柄などの無機質なデータベースでなく、心や人柄などの柔らかいデータベースである。これらに触れた「凡人」の新しい小さな行動の喚起こそが、最も重要なアウトカムであると考える。冒頭に述べた、地域内のさまざまな専門性や現場を持つ人々をつなげ、「自己組織性による創発」を生み出し、課題が解決されていくリゾーム型の地域社会に向けて必要な心構えについて、終論として提言を行う。

（文字数：3399 字）